

女子短大生の学生調査に関する報告

武藤 玲路・森 弘行・山口 ゆかり
本村 弥寿子・荒木 正平

Report on student survey of female college students

Ryoji MUTO・Hiroyuki MORI・Yukari YAMAGUCHI
Yasuko MOTOMURA・Shohei ARAKI

キーワード：学生調査、学修成果、学生支援、経年変化、女子短大生

1. 背景と目的

文科省は2012年に中教審答申の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」¹⁾において、共通の考え方や尺度から成る「アセスメント・ポリシー（査定の方針）」に則って教育の成果を評価し、その結果を教育の改善・進化につなげる「改革サイクル」の必要性を提唱した。また、2016年3月に「学校教育法施行規則の一部を改正する省令」²⁾を公布し、3つのポリシーの策定と公表を法的に義務化し、さらに同年同月に「3つのポリシーの策定及び運用に関するガイドライン」³⁾を示した。

これにより、「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」「入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）」の3つのポリシーに、「査定の方針（アセスメント・ポリシー）」を加えた4つのポリシーについて、整合性と具体性の検討が早急の課題となった。

本稿は以上の点を踏まえ、長崎女子短期大学で実施した学生調査の学修成果と学生支援について、短大2年間の経年変化を比較検討し、上記の4つのポリシーに基づく教育の内部質保証の一助とすることを目的とした。

2. 方法

2.1 調査対象・実施時期（表1）

本稿では、長崎女子短期大学の全学生を対象に2014年と2015年の2年間にパネル調査（追跡調査）を実施した。学科・コースの構成は、生活創造学科の栄養士コース（記号S）、ビジネス・医療秘書コース（記号L）、介護福祉士コース（記号F）と幼児教育学科（Y）である。

2.2 調査項目・調査手順

学生調査には、短期大学コンソーシアム九州（JCCK7短大）が開発した「共同教学IRネットワークシステム2014年度版」および「短大生の

表1. 学生調査の実施時期と回答率

	1年後期 (2014年11月～12月調査分)	2年後期 (2016年1月～2月調査分)	1年後期・2年後期 両方回答
栄養士コース	37名/46名 (80.4%)	44名/44名 (100.0%)	36名/46名 (78.3%)
ビジネス・医療秘書コース	25名/26名 (96.2%)	24名/24名 (100.0%)	23名/26名 (88.5%)
介護福祉士コース	9名/12名 (75.0%)	10名/10名 (100.0%)	9名/12名 (75.0%)
幼児教育学科	100名/116名 (86.2%)	103名/107名 (96.3%)	94名/116名 (81.0%)
合計	171名/200名 (85.5%)	181名/191名 (94.8%)	162名/200名 (81.0%)

学びと生活」に関する調査の設問を用い、長崎女子短期大学の情報演習室で学科・コース別に Web 上で実施した。質問の内容と形式は、「学修成果の到達度」と「学生支援の満足度」について、学生が5段階で自己評価するもので、調査の所用時間はPCの起動と説明を含めて約30分間であった。

2.3 結果の処理

学生調査の回答は、全学および学科・コース別に分類集計し、それぞれについて以下の可視化グラフを作成した。

- ①学修成果の能力別時期別のレーダーチャート、および複合グラフ
- ②学修成果の能力別時期別の散布図
- ③学修成果の能力別5段階評価別の積み上げ横棒グラフ
- ④学生支援の能力別時期別のレーダーチャート、および複合グラフ
- ⑤学生支援の能力別時期別の散布図
- ⑥学生支援の能力別5段階評価別の積み上げ横

棒グラフ

3. 結果

3.1 全学科・コースの特徴

(1) 学修成果の到達度の傾向 (図1~3)

2年後期に学修成果の評価が高い能力は「最後までやりぬく力」「一般的な常識や礼儀・マナー」「人とのコミュニケーション能力」「チームで仕事をする力」であり、低い能力は「リーダーシップ」「自分に対する自信」である。

1年間の学修の成果が顕著にみられる能力は「ひとつの問題を深く探求する態度」「自分に対する自信」「一般的な常識や礼儀・マナー」である。また、5段階評価の割合には、1年後期と2年後期の間にほぼ全ての項目に顕著な経年変化はみられない。

(2) 学生支援の満足度の傾向 (図4~6)

2年後期に学生支援の評価が高い項目は「専門的知識や技術を身につける授業」「学外体験(実習やインターンシップ)の機会」「実践(職業)

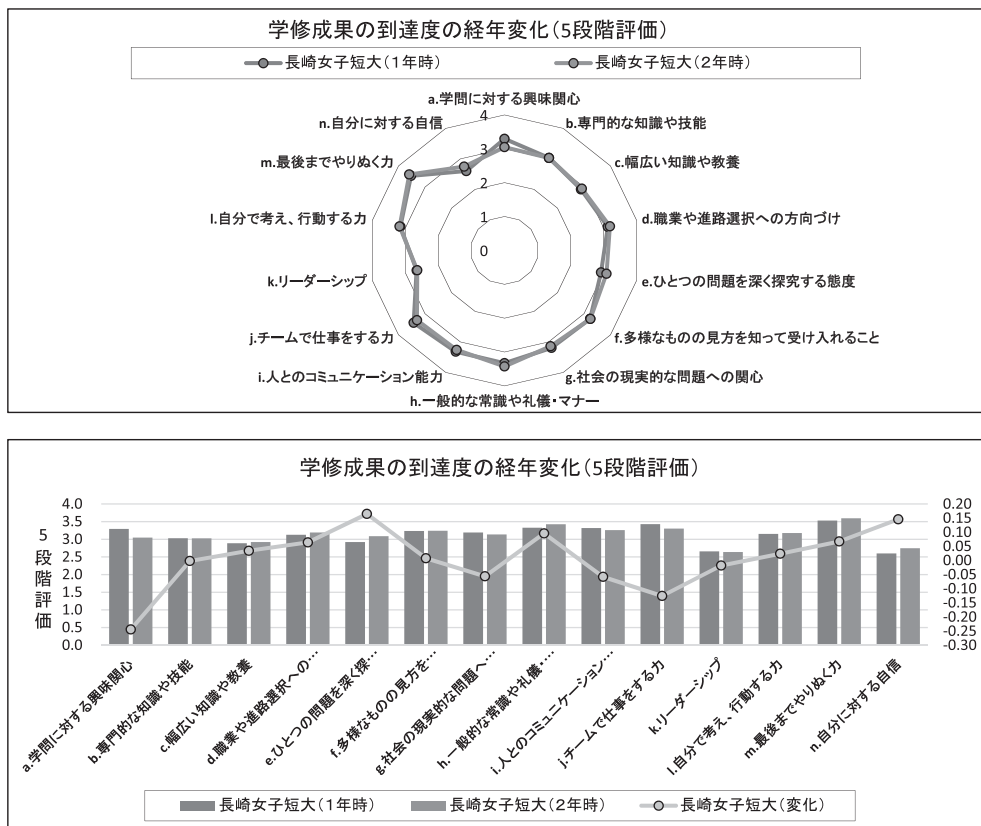


図1. 全学科・コースにおける学修成果の経年変化

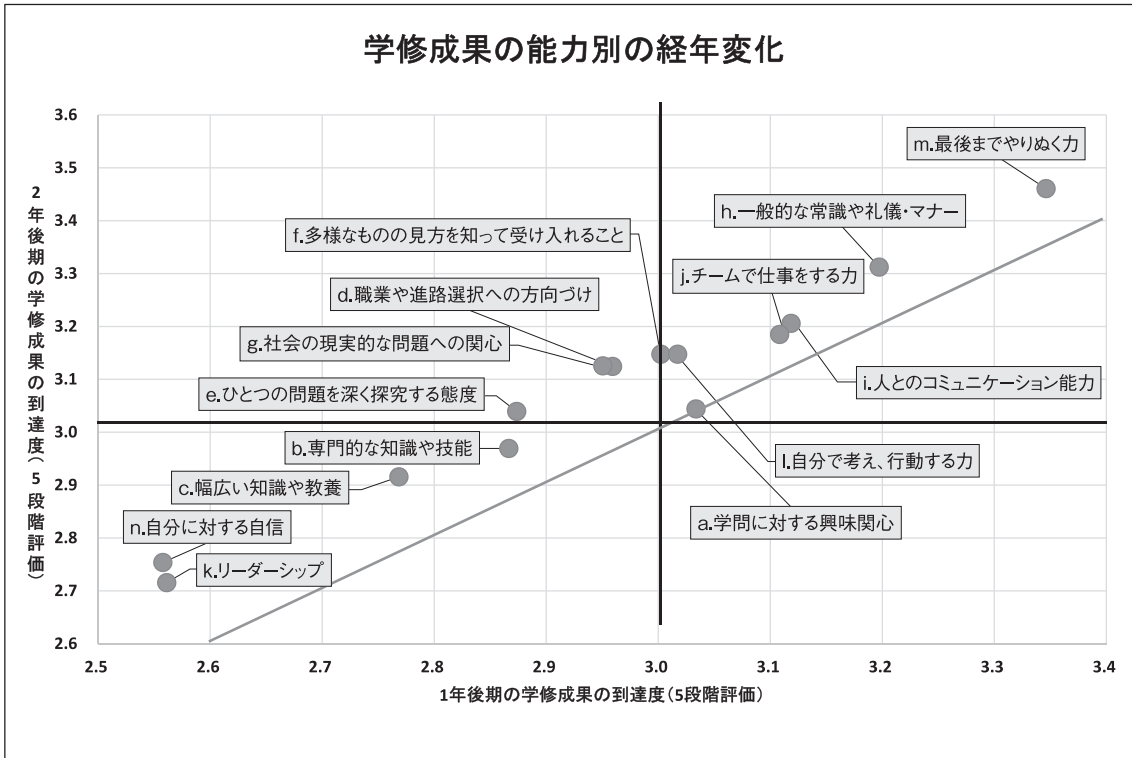


図2. 全学科・コースにおける学修成果の能力別変化

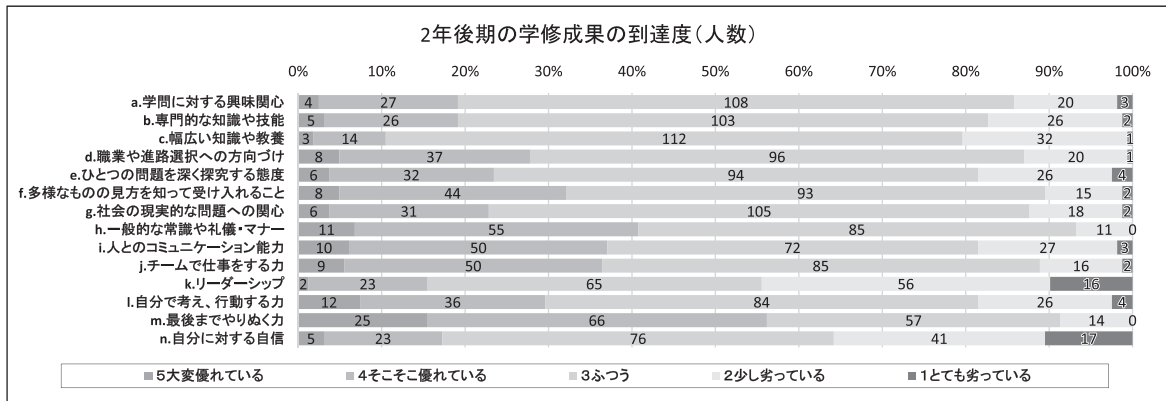
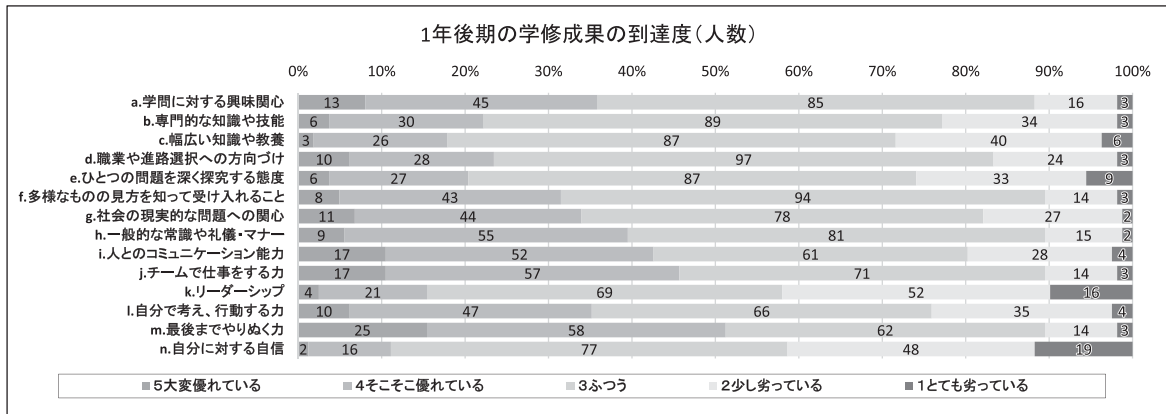


図3. 全学科・コースにおける学修成果の5段階評価の割合

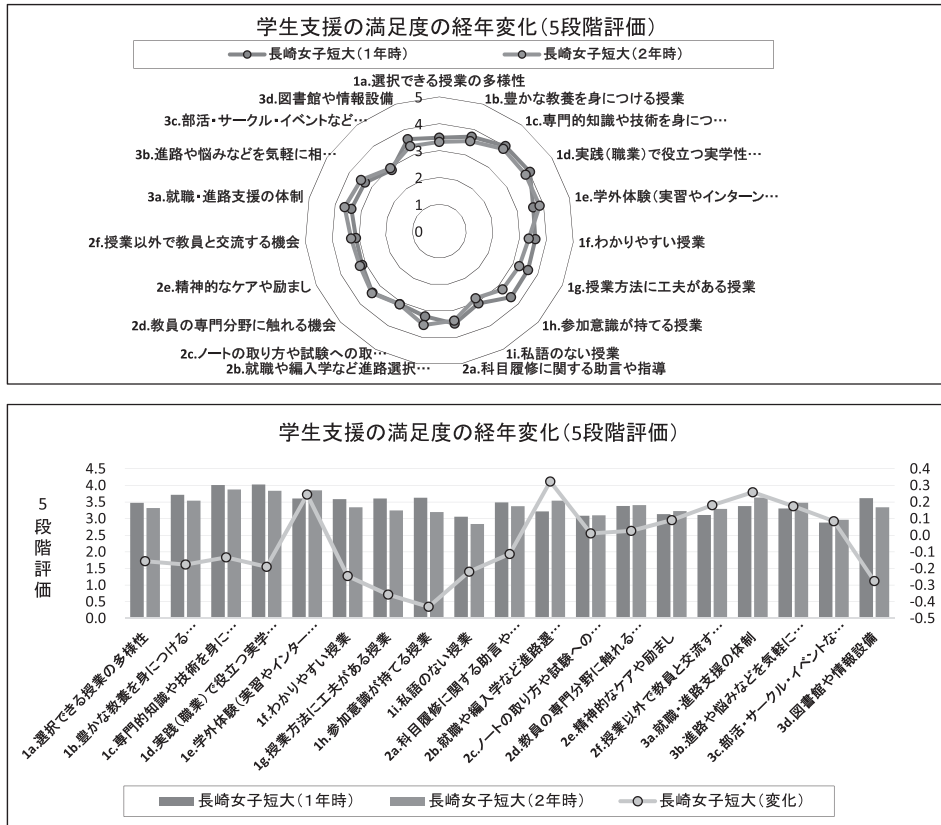


図4. 全学科・コースにおける学生支援の経年変化

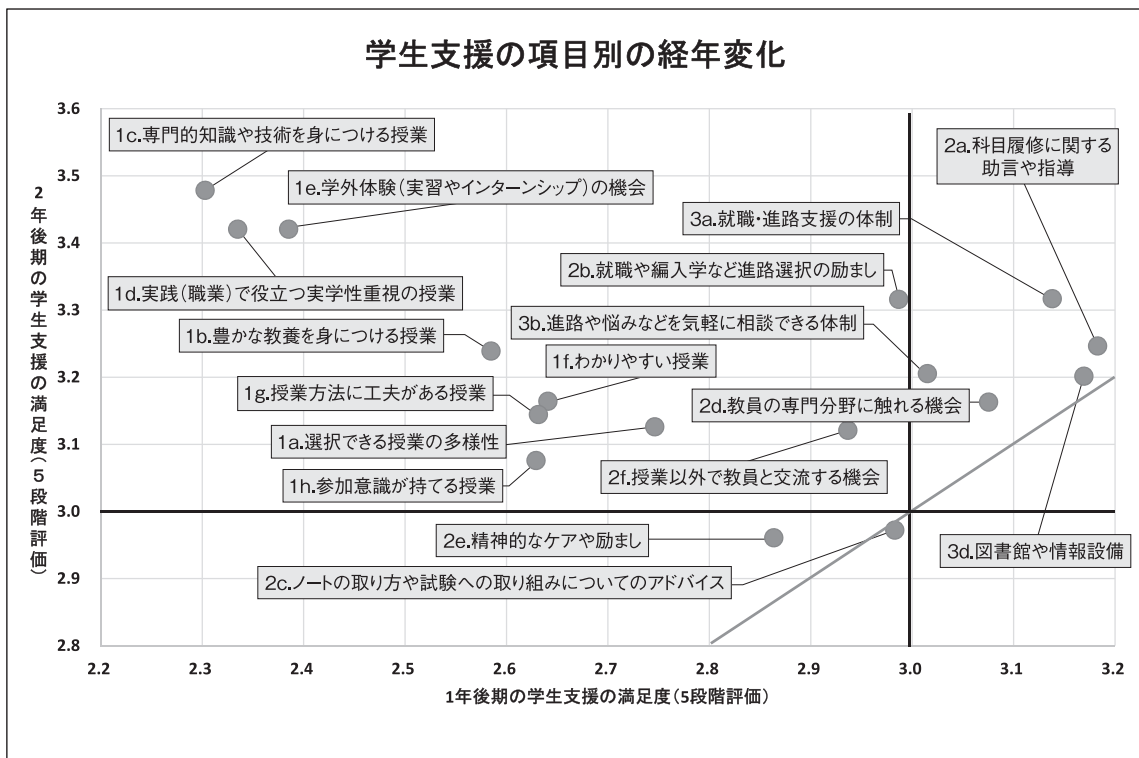


図5. 全学科・コースにおける学生支援の項目別変化

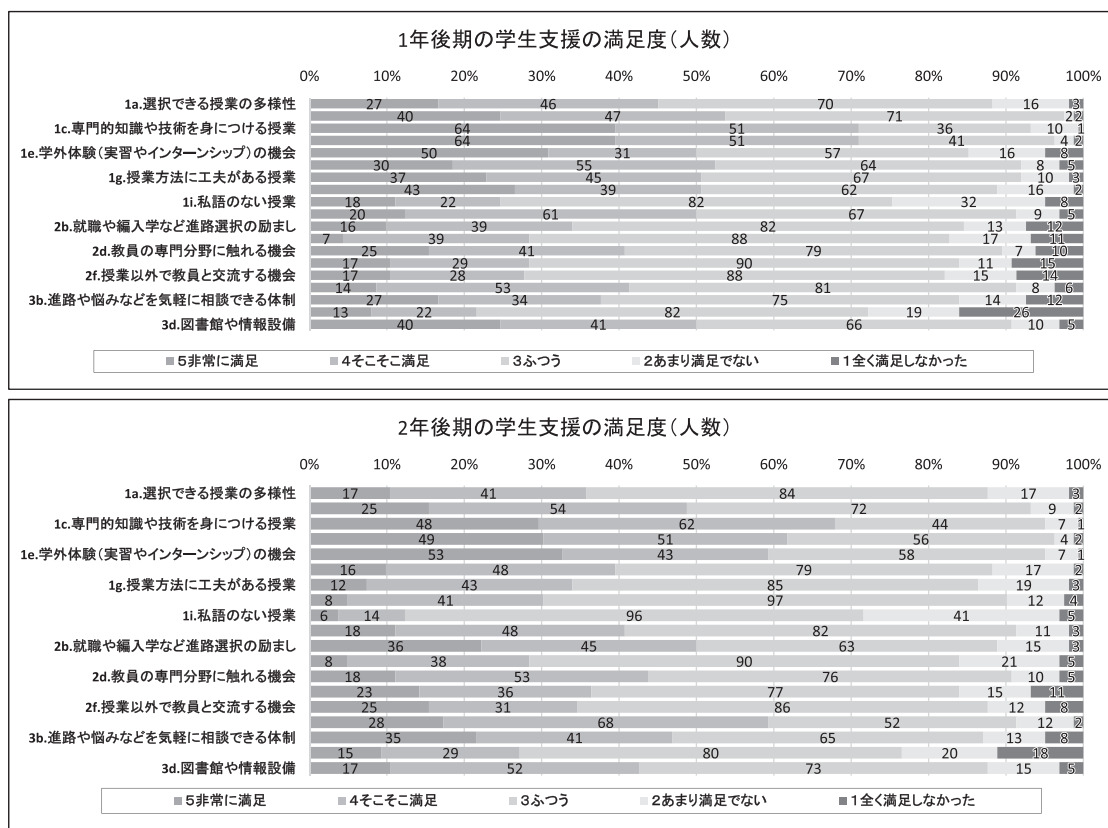


図 6. 全学科・コースにおける学生支援の5段階評価の割合

で役立つ実学性重視の授業」であり、低い項目は「精神的なケアや励まし」「ノートを取り方や試験への取り組みについてのアドバイス」である。

1年間の支援の成果が顕著にみられる項目は「就職や編入学など進路選択の励まし」「就職・進路支援の体制」「学外体験(実習やインターンシップ)の機会」である。また、5段階評価の割合では、2年後期にはほぼ全ての項目で「全く満足しなかった」回答が顕著に減少している。

3.2 生活創造学科「栄養士コース」の特徴

(1) 学修成果の到達度の傾向と所見(図7~9)

2年後期に学修成果の自己評価が最も高い能力は、「最後までやり抜く力」であった。これは、資格取得を重視した学修支援体制と授業外学修を促すために行った課題への取組の成果ではないかと思われる。

一方、自己評価が低い能力は、「リーダーシップ」「自分に対する自信」「幅広い知識や教養」であった。これは、目標に向けた個人の志向、社会人基礎力、学力等が影響したことに加え、個々に

対する支援体制に課題が生じたためと考えられる。

次に、1年間の学修成果が現れた能力は、「ひとつの問題を深く探求する態度」「自分に対する自信」「自分で考え、行動する力」であった。しかし、その成果は、顕著ではなかった。これは、回答率の向上が影響したものと考えられる。なお、5段階評価の割合では、「学問に対する興味関心」「専門的な知識や技能」「幅広い知識や教養」において、「大変優れている」「そこそ優れている」の回答が減少し、「とても劣っている」「劣っている」の回答が若干増加したことから、知識や技能の修得に対して、苦手意識が高まった学生の存在が明らかになった。

(2) 学生支援の満足度の傾向と所見(図10~12)

2年後期に学生支援の評価が高い項目は、「専門的知識や技術を身につける授業」「実践(職業)で役立つ実学性重視の授業」「学外体験(実習やインターンシップ)の機会」であった。これには、資格取得を重視したカリキュラム編成が影響していると思われる。

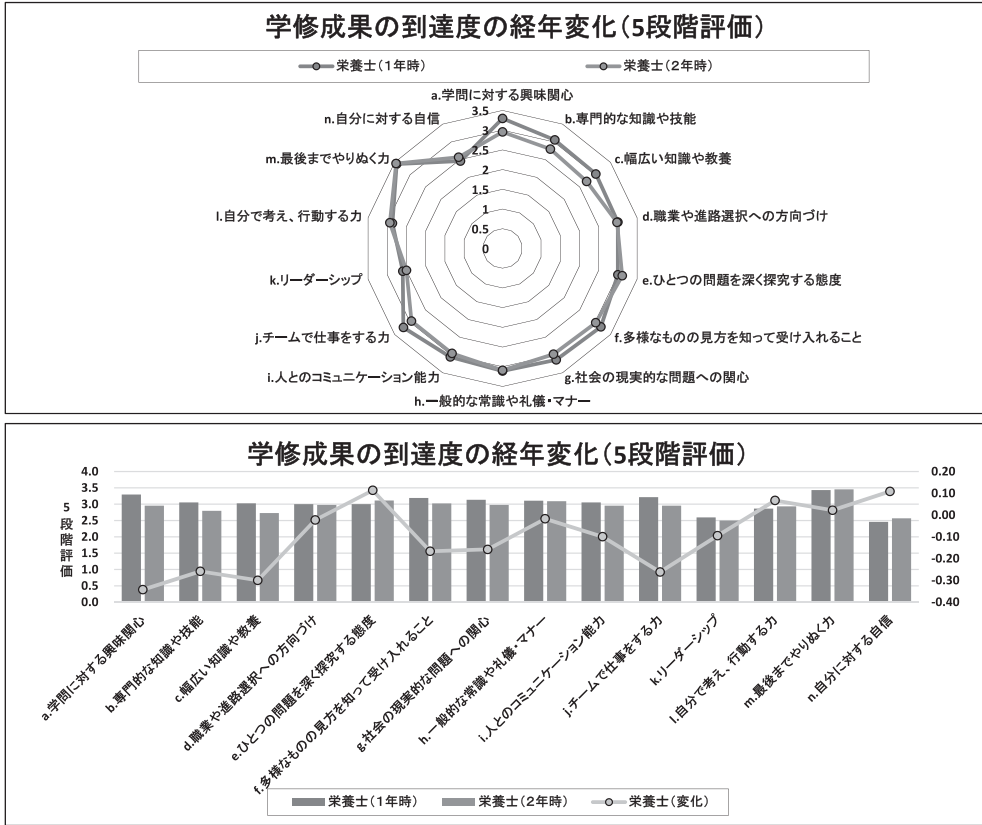


図7. 栄養士コースにおける学修成果の経年変化

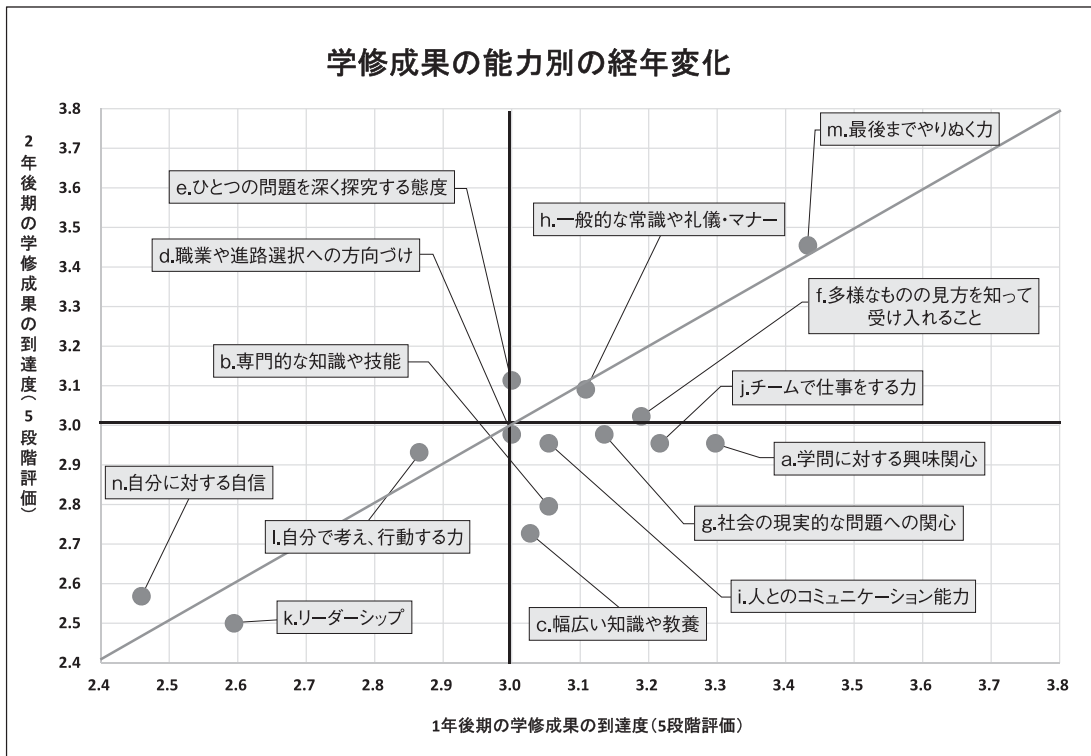


図8. 栄養士コースにおける学修成果の能力別変化

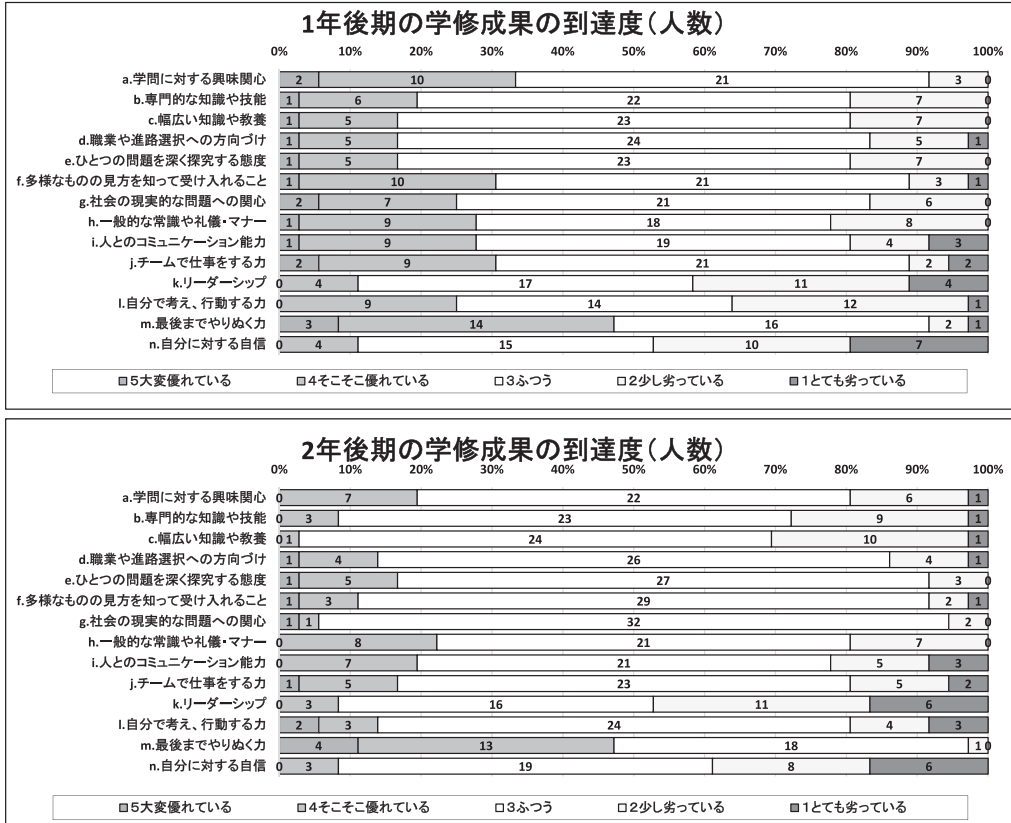


図9. 栄養士コースにおける学修成果の5段階評価の割合

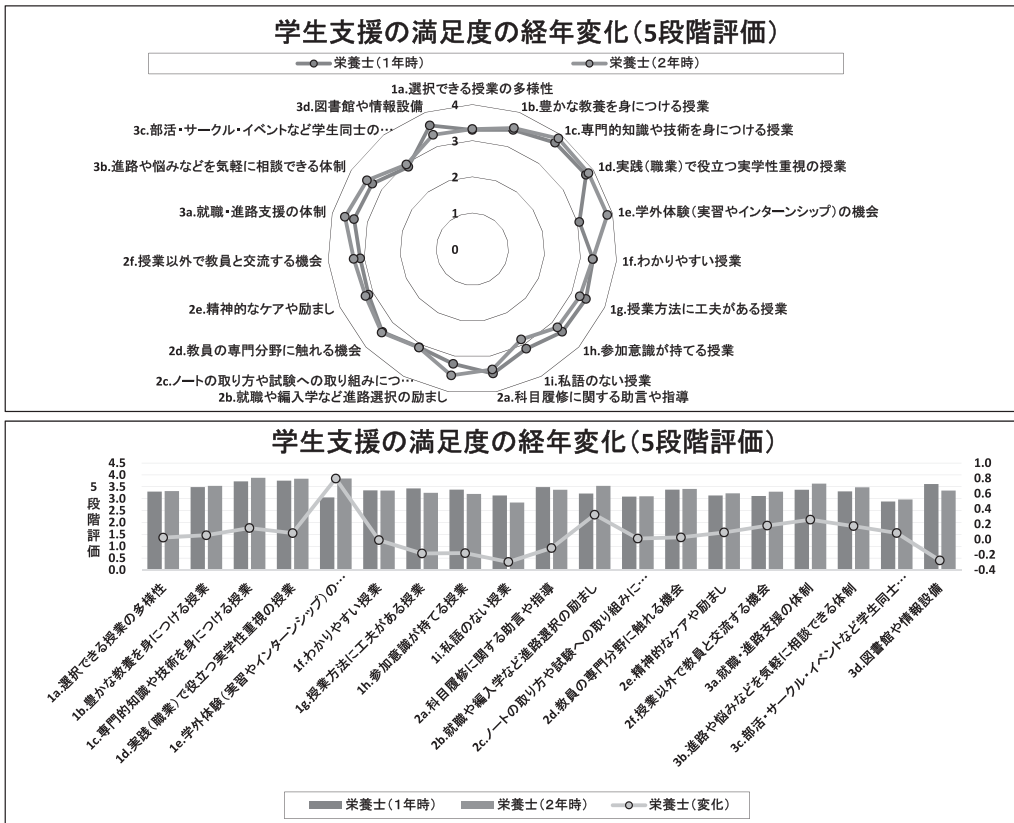


図10. 栄養士コースにおける学生支援の経年変化

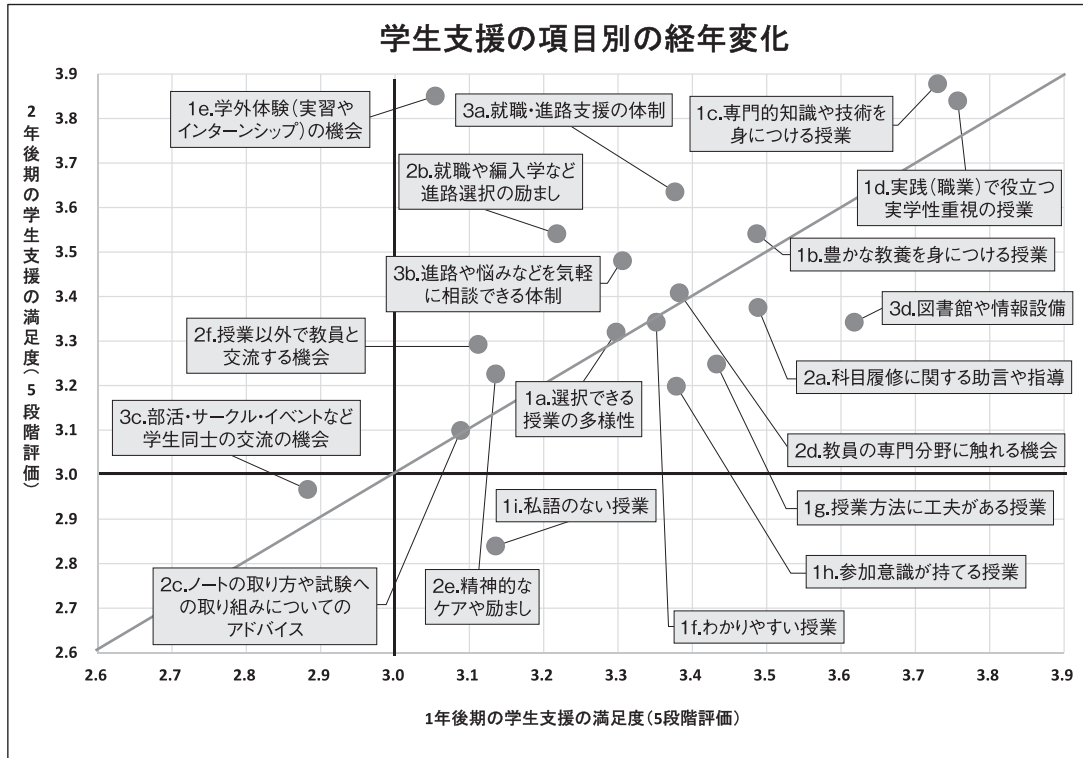


図11. 栄養士コースにおける学生支援の項目別変化

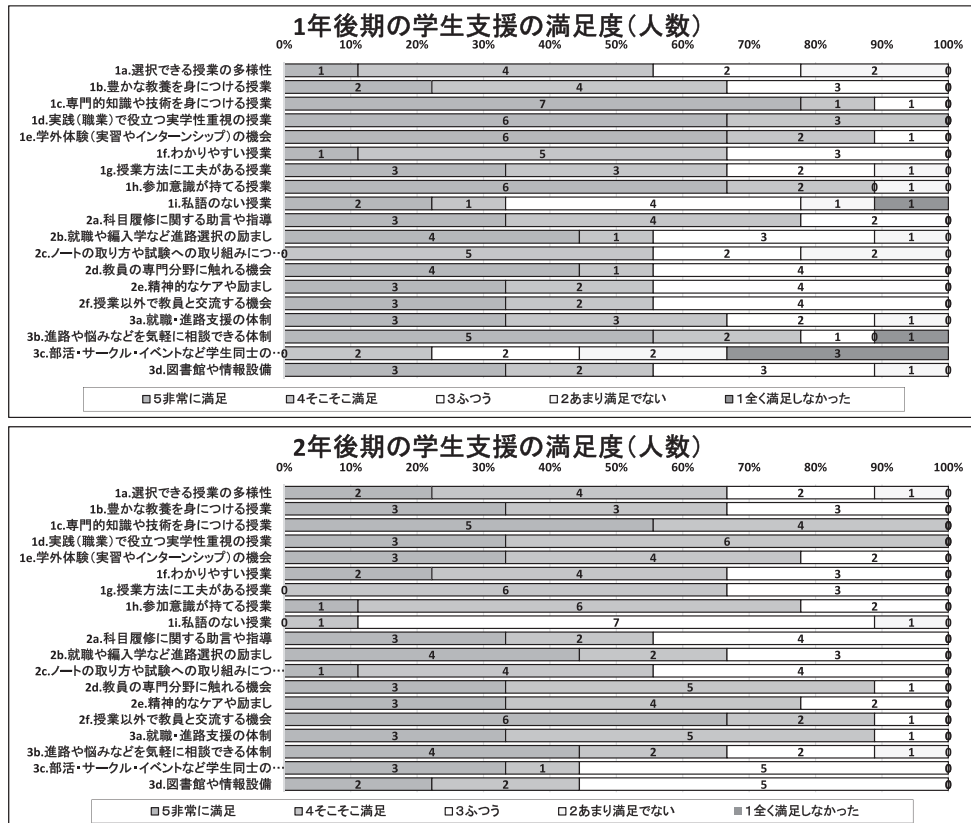


図12. 栄養士コースにおける学生支援の5段階評価の割合

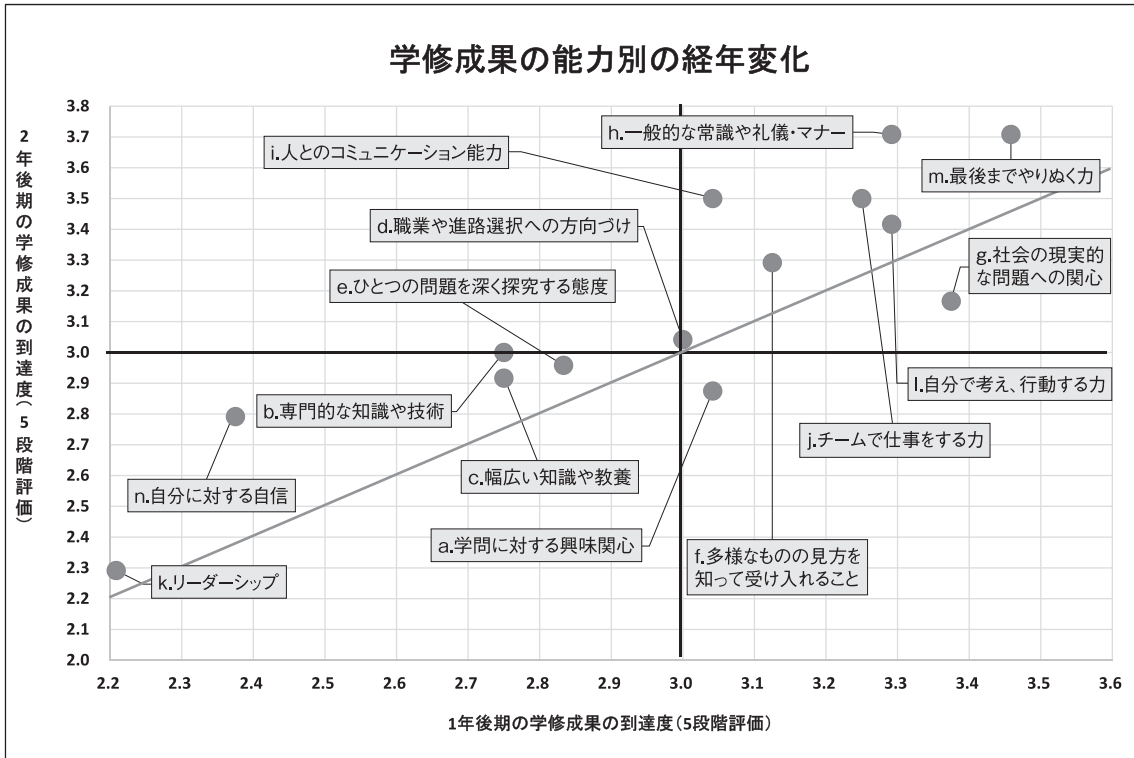


図14. ビジネスコースにおける学修成果の能力別変化

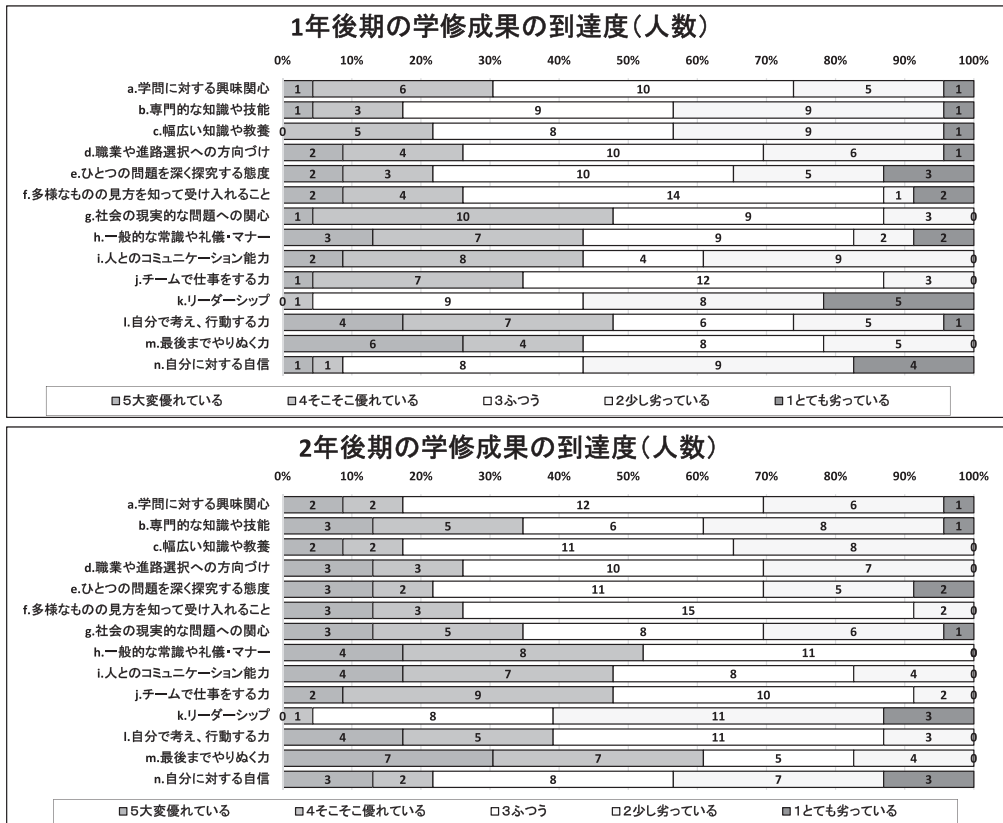


図15. ビジネスコースにおける学修成果の5段階評価の割合

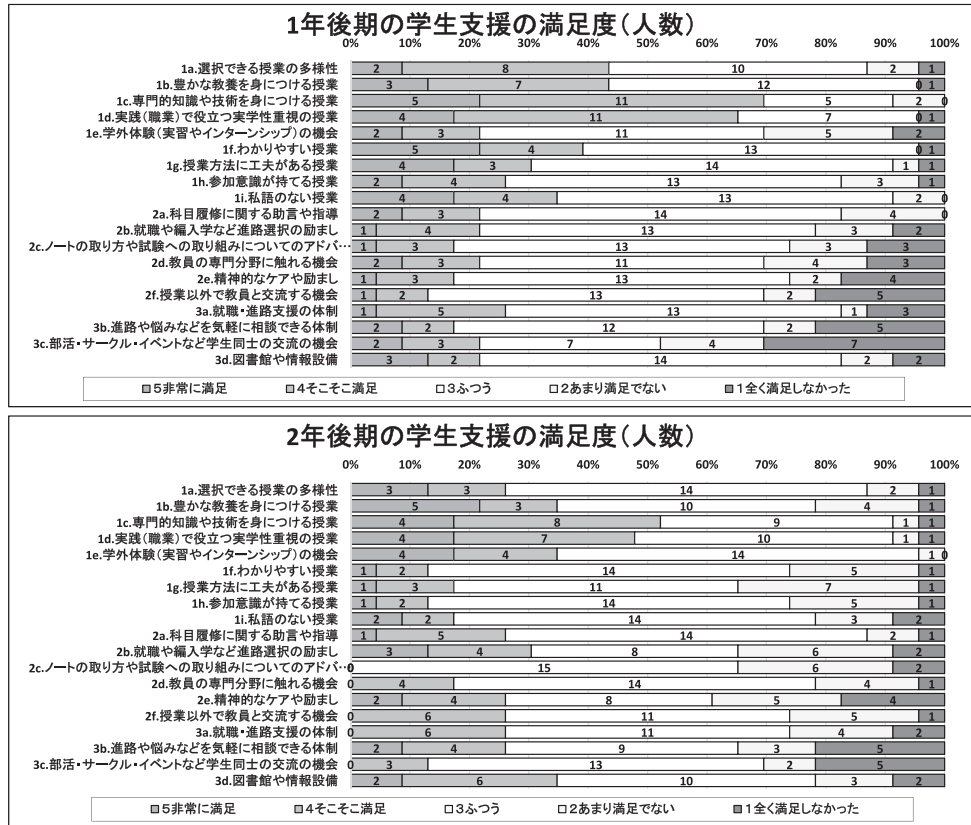


図18. ビジネスコースにおける学生支援の5段階評価の割合

(2) 学生支援の満足度の傾向と所見(図16~18)

2年後期に学生支援の評価が高い項目は「専門的知識や技術を身につける授業」「実践(職業)で役立つ実学性重視の授業」「学外体験(実習やインターンシップ)の機会」である。これには、就職と関連する授業や体験を特に重視する傾向が影響していると思われる。

一方、評価が低い項目は「ノートの取り方や試験への取り組みについてのアドバイス」「部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会」「進路や悩みなどを気軽に相談できる体制」「精神的なケアや励まし」である。これは、学生個々の対する支援体制の不備によるものであり、今後の適切な対応が急務であると言える。

1年間の支援の成果が顕著にみられる項目は「学外体験(実習やインターンシップ)の機会」「授業以外で教員と交流する機会」である。また、5段階評価の割合では、2年後期にほぼ全ての項目で「全く満足しなかった」回答に若干の減少がみられる。

3.4 生活創造学科「介護福祉士コース」の特徴

(1) 学修成果の到達度の傾向と所見(図19~21)

2年後期に学修成果の自己評価が高い能力は「多様なものの見方を知って受け入れること」「チームで仕事をする力」である。これは、介護福祉士の学習に欠かせない受容的で非審判的な態度や考え方、支援対象者の個別性を尊重することの重要性について、ロールプレイなどを取り入れた多様な演習型の授業を通して学習していることを示すものと考えられる。また介護現場における実習と、実習での学びを事例研究にまとめることで、利用者支援における他者との連携やチームでの取組みの重要性を実感したことを学生が実感しているとも思われる。他に、地域交流活動によるグループ学習や地域住民との交流を含む演習授業等のアクティブラーニングの意義もみとめられよう。

一方、自己評価が低い能力は「幅広い知識や教養」「専門的な知識や技能」である。これは、学習成果の自己評価が高かった「多様なものの見方」「チームで仕事をする力」の裏返しとしての、

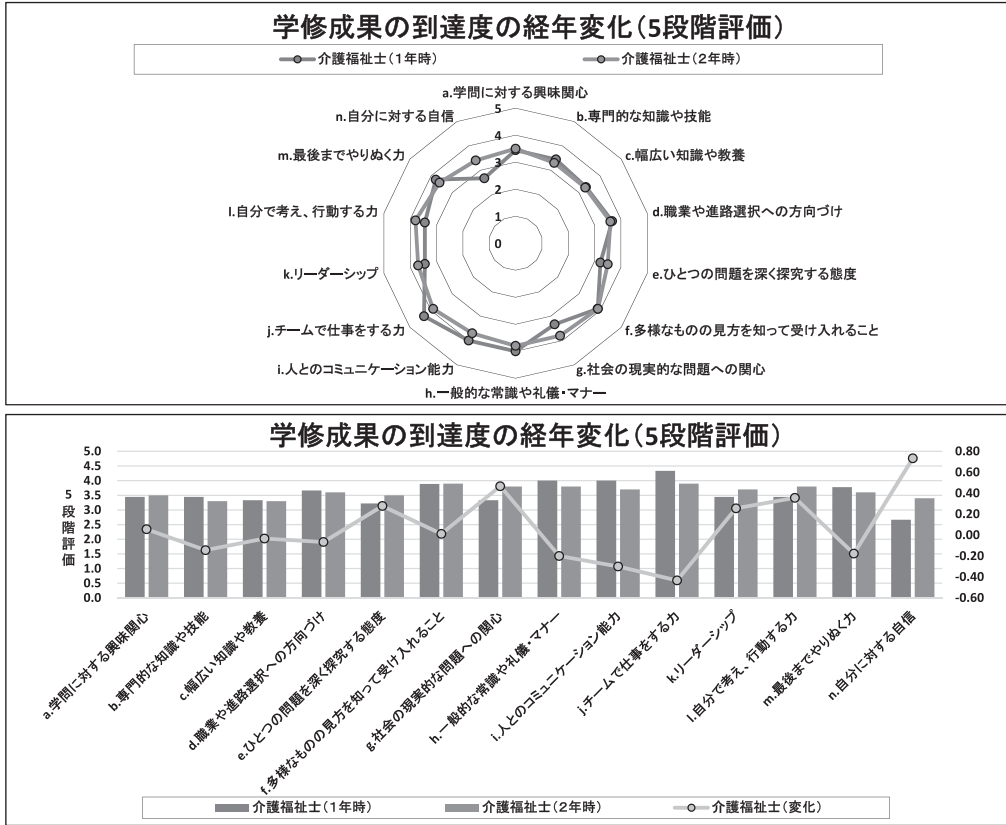


図19. 介護福祉士コースにおける学修成果の経年変化

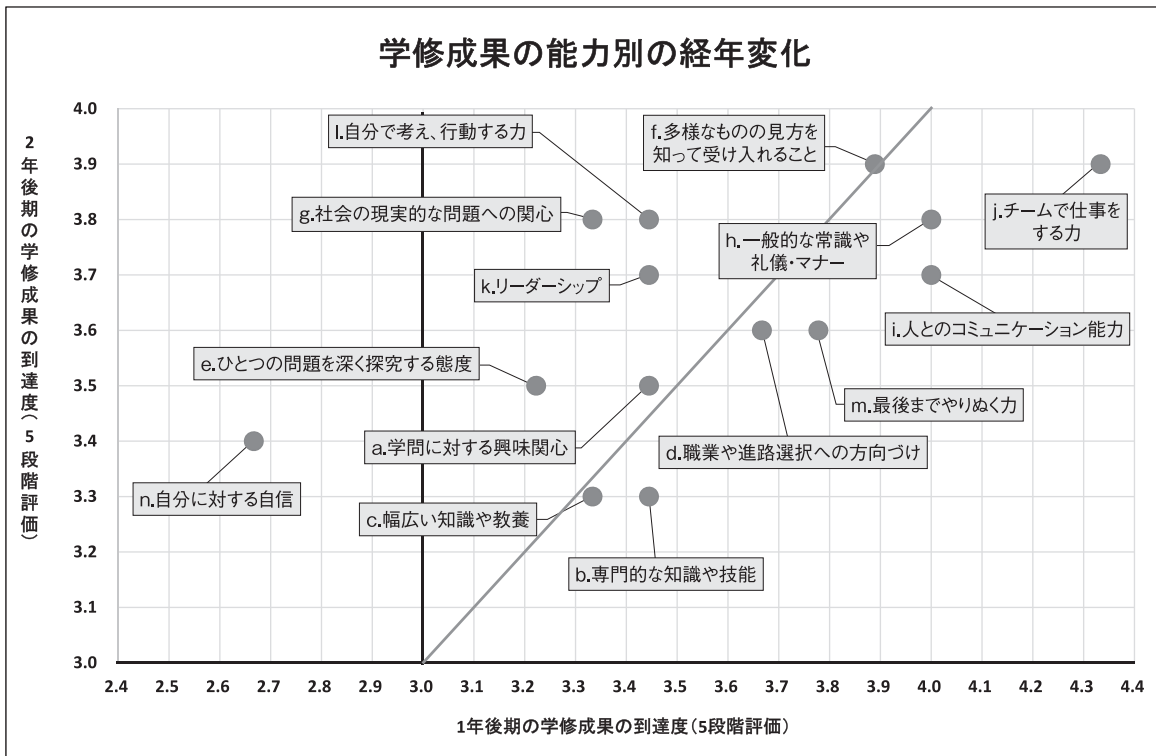


図20. 介護福祉士コースにおける学修成果の能力別変化

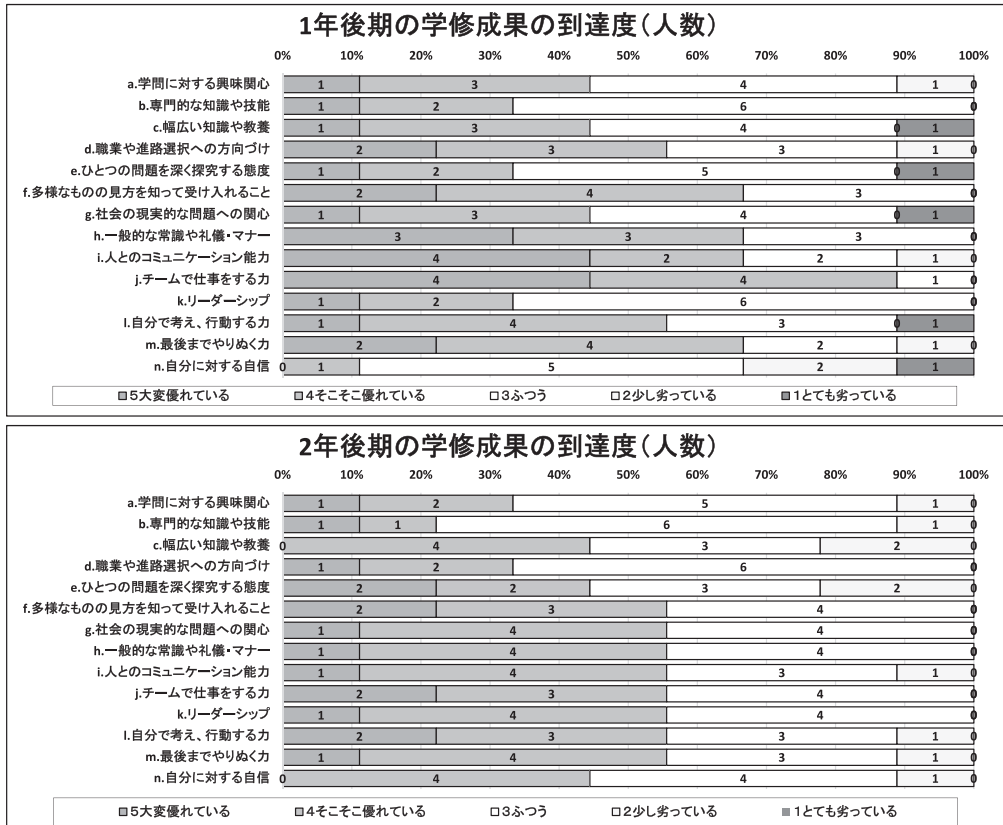


図21. 介護福祉士コースにおける学修成果の5段階評価の割合

課題意識の芽生えととらえられる。介護についての実践的な学習を深めるなかで、学生は、他者を知り他者と連携して、個性性にそった支援を実施することの重要性を理解する。その過程で、「知識や教養」の不足を知ることは、今後の学びの意欲を起動するものとして肯定的に捉えられるものと思われる。

1年間の学修の成果が顕著にみられる能力は「自分に対する自信」「自分で考え行動する力」「ひとつの問題を深く探求する態度」「社会の現実的な問題への関心」である。また、5段階評価の割合では、2年後期に全ての項目で「とても劣っている」回答が消失している点が特徴的である。

(2) 学生支援の満足度の傾向と所見(図22～24)

2年後期に学生支援の評価が高い項目は「専門的な知識や技術を身につける授業」「実践(職業)で役立つ実学性重視の授業」「授業以外で教員と交流する機会」である。ここからは、介護技術に関連する実践的授業や専門知識・技術を特に重視する傾向が読み取れる。

一方、評価が低い項目は「私語のない授業」「図書館や情報設備」である。本コースでは実践的な参加型授業や演習が多いこともあり、授業中になされる学生間の会話が本調査においてどのように評価に反映されているのかは、急ぎ確認の必要がある。また設備面では、学生の意向の確認も含め、適切な対応が必要となる。

1年間の支援の成果が顕著にみられる項目は「部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会」「授業以外で教員と交流する機会」である。また、5段階評価の割合では、2年後期に全ての項目で「全く満足しなかった」回答が消失している点が特徴的である。

3.5 「幼児教育学科」の特徴

(1) 学修成果の到達度の傾向と所見(図25～27)

2年後期に学修成果の自己評価が高い力は「最後までやり抜く力」「一般的な常識や礼儀・マナー」「多様なものの見方を知って受け入れること」「人とのコミュニケーション能力」「チームで仕事をする力」である。これは、卒業研究での課

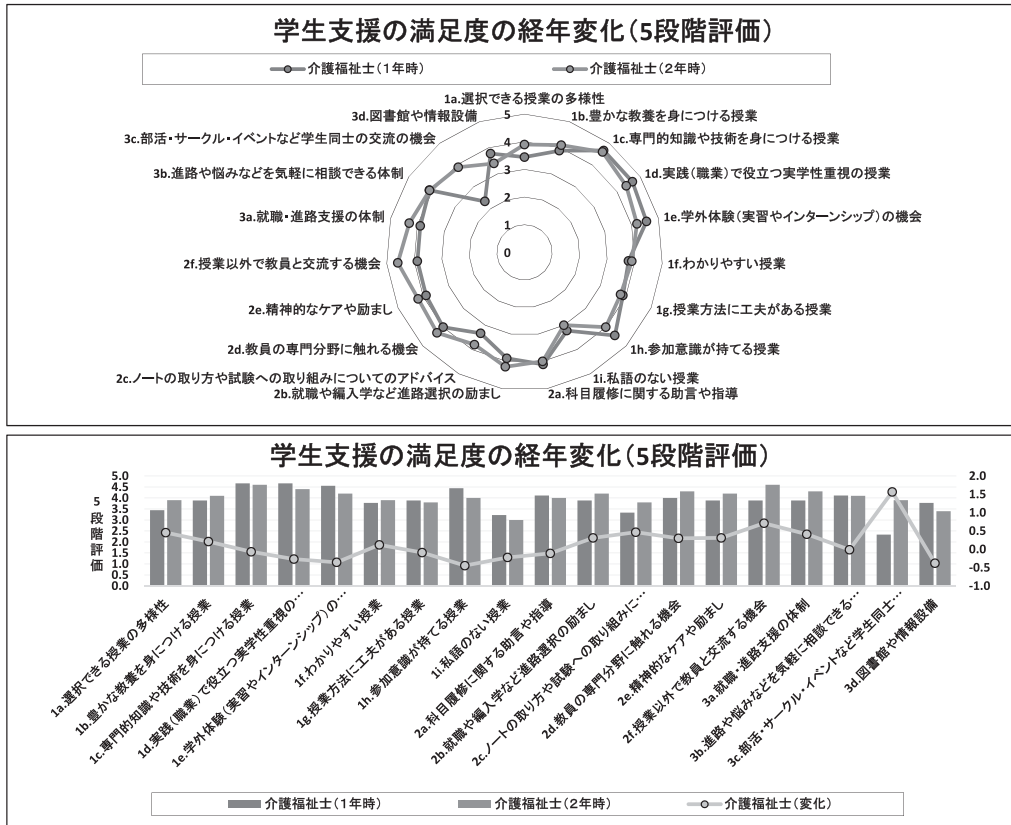


図22. 介護福祉士コースにおける学生支援の経年変化

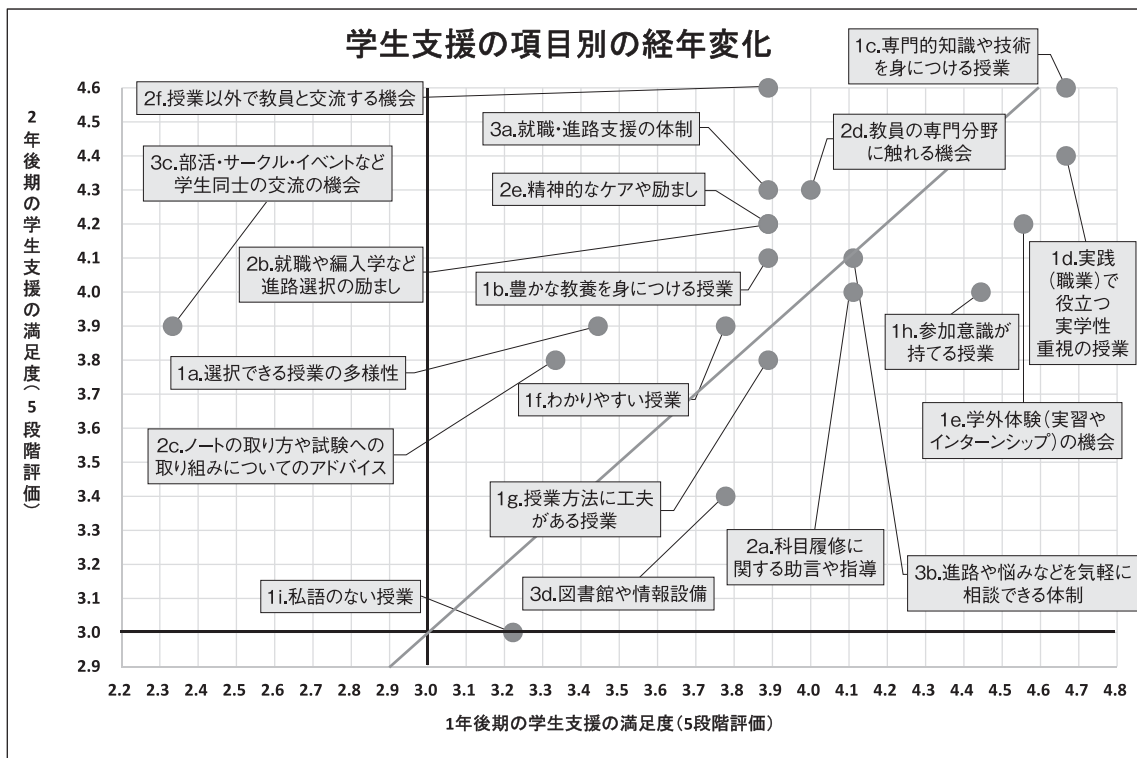


図23. 介護福祉士コースにおける学生支援の項目別変化

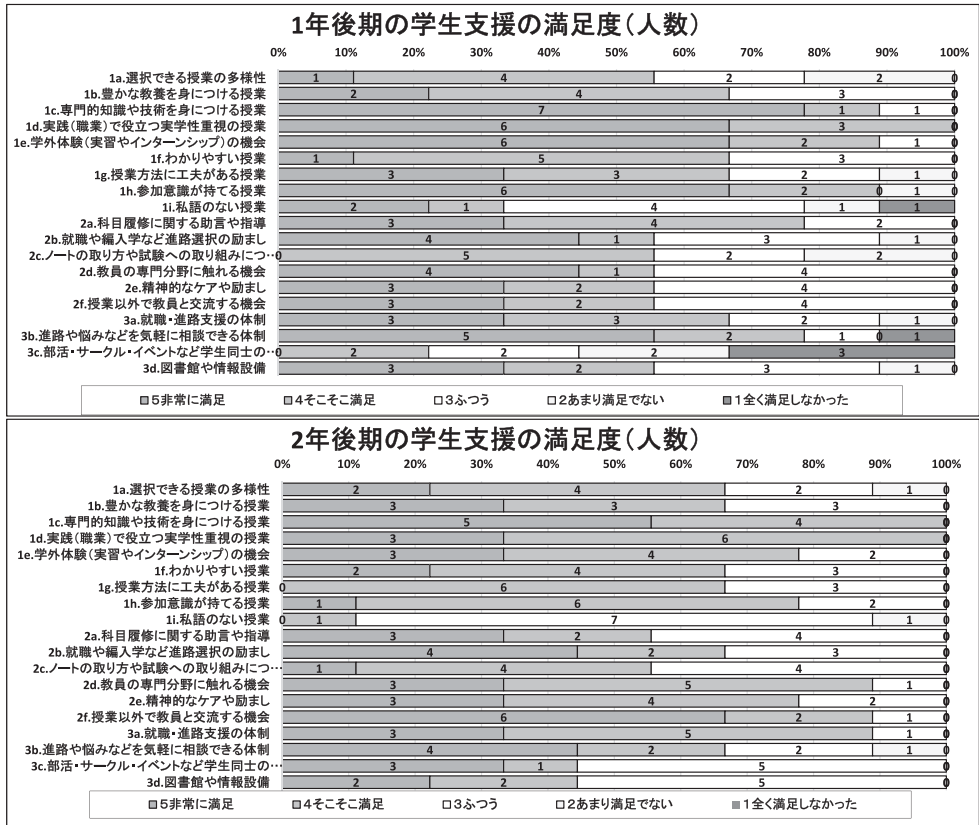


図24. 介護福祉士コースにおける学生支援の5段階評価の割合

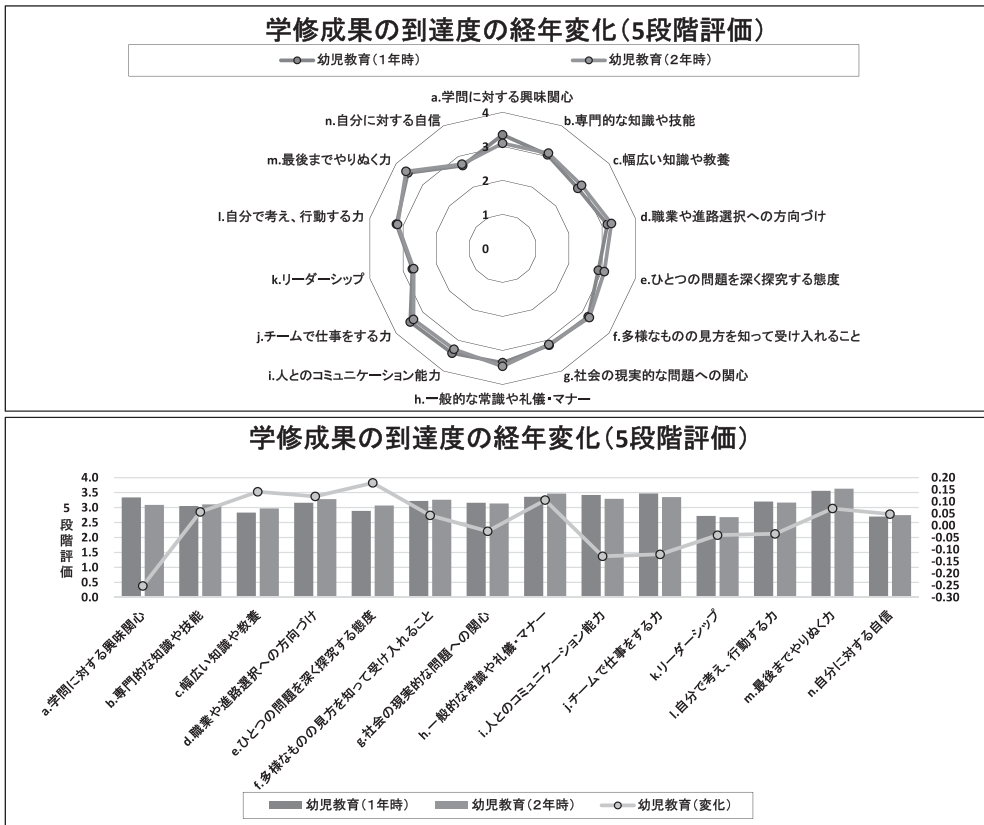


図25. 幼児教育学科における学修成果の経年変化

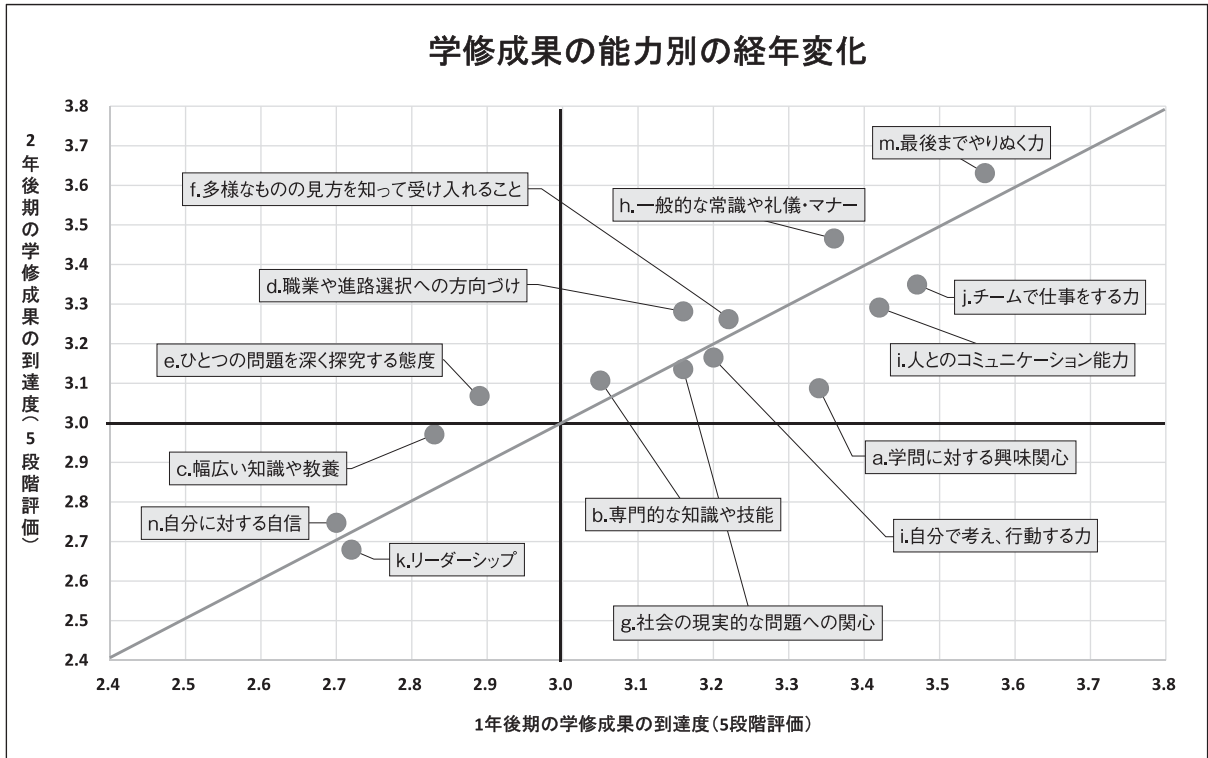


図26. 幼児教育学科における学修成果の能力別変化

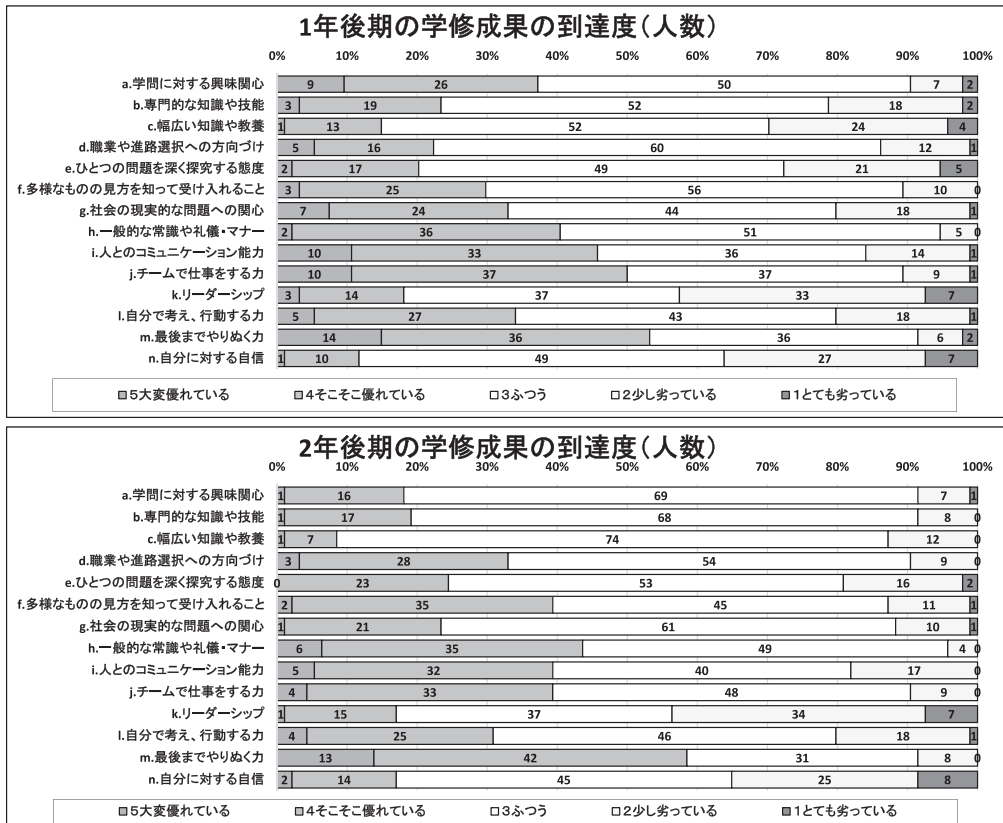


図27. 幼児教育学科における学修成果の5段階評価の割合

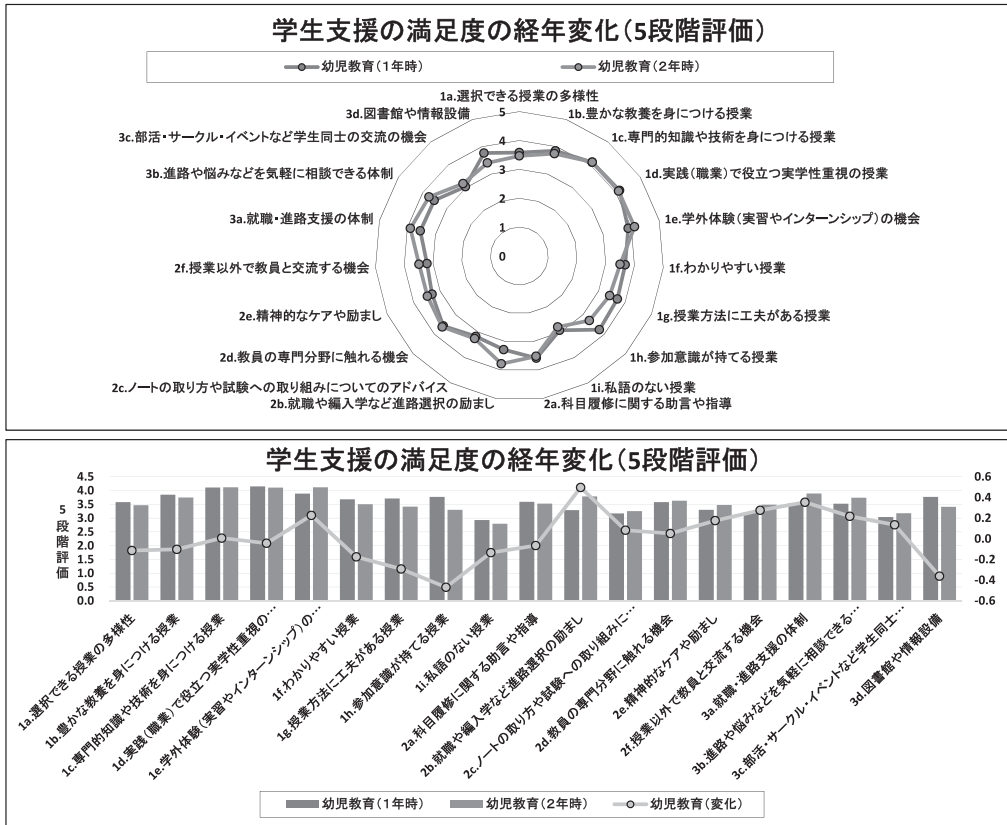


図28. 幼児教育学科における学生支援の経年変化

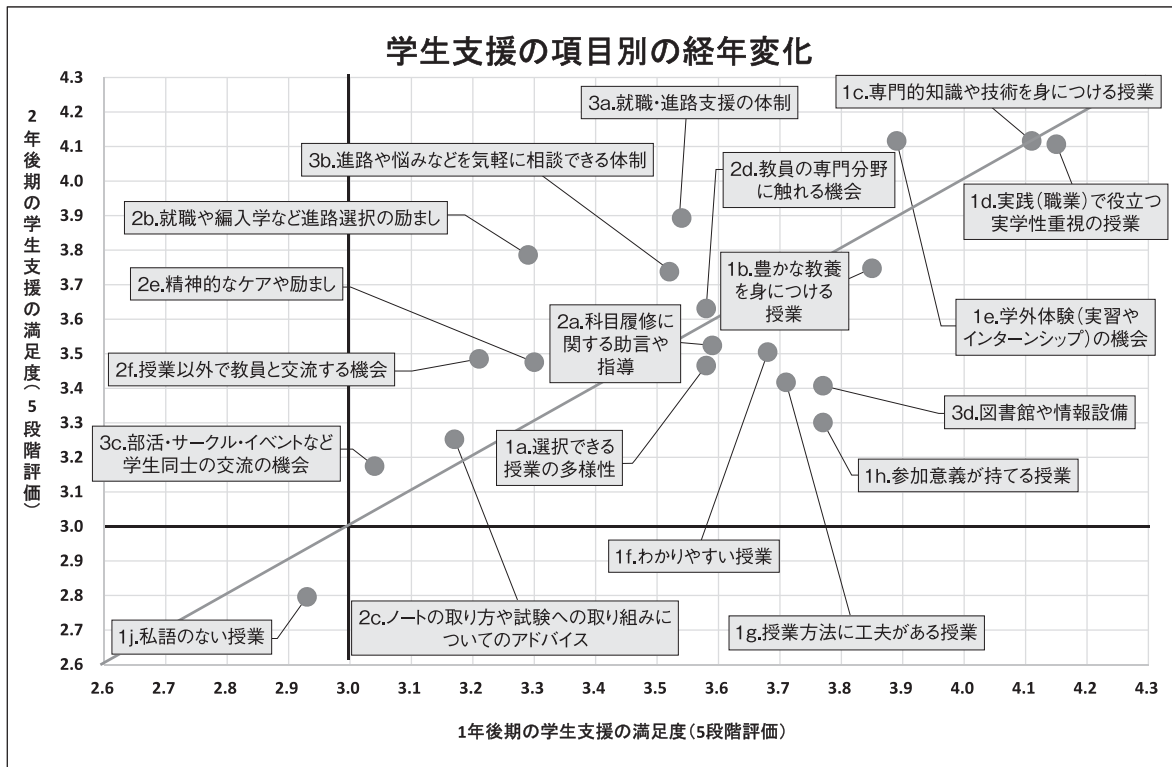


図29. 幼児教育学科における学生支援の項目別変化

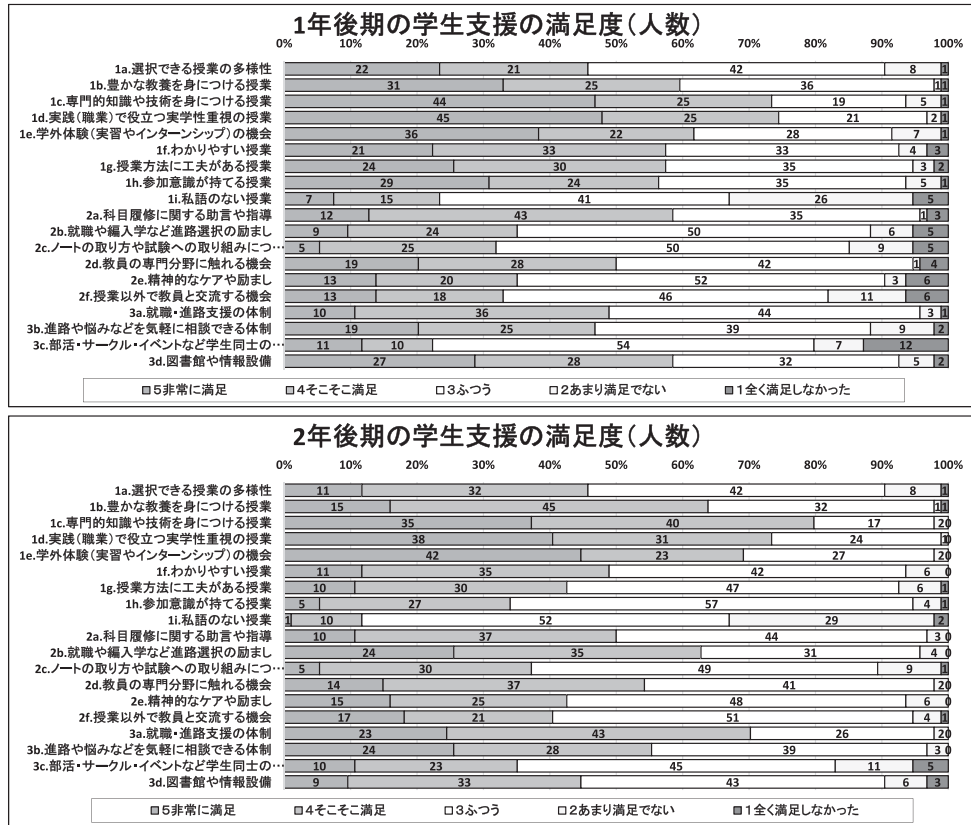


図30. 幼児教育学科における学生支援の5段階評価の割合

題探求型学習やグループによる学習及び作業、また、学外実習における学びの成果ではないかと思われる。

一方、自己評価が低い能力は「幅広い知識や教養」「リーダーシップ」「自分に対する自信」である。これは、学生の興味・関心・意欲の低さや短大入学前の社会人基礎力の修得不足、さらに短大における学習内容や学習形態等が影響しているのではないかと考えられる。

1年間の学修の成果が顕著にみられる能力は「ひとつの問題を深く探究する態度」「幅広い知識や教養」「職業や進路選択への方向づけ」「一般的な常識や礼儀・マナー」である。また、5段階評価の割合では、2年後期に、物事への取り組みに関する項目において「そこそこ優れている」回答に増加がみられ、ほとんどの項目において「とても劣っている」回答に減少が見られる。

(2) 学生支援の満足度の傾向と所見(図28~30)

2年後期に学生支援の評価が高い項目は「専門的知識や技術を身に付ける授業」「実践(職業)

で役立つ実学性重視の授業」「学外体験(実習やインターンシップ)の機会」である。これは、保育現場で必要な技能や技術の習得を重視した授業や体験が影響していると思われる。

一方、評価が低い項目は「私語のない授業」である。これは、学生が興味を持って主体的に取り組める内容の授業の構成や、学生の注意すべき態度を見逃さない等、教員のメリハリのある授業が求められていると思われる。

1年間の支援の成果が顕著にみられる項目は「就職や編入学など進路選択の励まし」「就職・進路支援の体制」である。また、5段階評価の割合では、2年後期にほぼ全ての項目で「全く満足しなかった」回答に減少が見られる。

4. まとめ

4.1 IRシステムの現状と課題

従来の本学独自の学生調査では、学科やコース間での傾向の違いを見ることしかできなかったが、短期大学コンソーシアム九州との連携により、統一された学生調査の結果が得られることで、本学

の強みや弱みの分析できたことは前進である。そして、その分析結果に基づいて教育改革へのフィードバックを実施し、改善のサイクルを確立する必要がある。また調査によるデータの蓄積、分析結果を教職員が共有し、これによって、本学の全般的な教育やサービス改善につなげ、さらに学内の学生一人ひとりのデータを連結し、学生への個別支援や教育改善につなげることが求められている。

しかしながら、本学の学生データ管理の現状は、各学科・コース、教務課、学生課、キャリア支援センター、入試広報室、自己点検評価室などに分散しており、全学的に統合されていない。森によるデータベースシステムも運用されているが、全てが網羅されているわけではなく、全学的な活用には程遠く利用は限定的である。何らかの集計を行うにしても、その基となるデータファイルをサーバーから探し出すことから始めなければならないのが現状である。

現在、平成29年度の運用開始を目指して学務システムの開発が進められている。教務課、学生課などに分散していたデータがようやく一元化され、これまでの定型業務がようやくシステム化されようとしている段階であり、付加的なサービスが提供できるようになるまでには時間を要すると思われる。今後は、アンケート調査等のデータと学務システムから抽出したデータとリンクし、統計学的な分析、そしてそれを学生や教職員へフィードバック、更なる教育の質の向上、学生の目標達成に寄与することが求められる。また、これまでも多くの分析レポートが印刷されて配布されているが、これらのデータベース化し検索可能な状態にすることで、一層の活用が見込まれる。

4.2 今後の学生調査システムの展望

「長崎女子短期大学の自己点検・評価における学修評価システムの構築」の詳細については、2017年の先行研究（武藤・森・山口・本村・荒木）⁴⁾で報告した通りである。今回実施した学生調査は、入学時から卒業後の教育の質保証やエンロールメント・マネジメント（学生のデータに基づいた入

学前から卒業後までの一貫したサポートの取組）において、組織の意思決定のための根拠資料として、大変重要な役割を担っている。そのため、学生調査の目的は本来各短大が掲げる学修成果およびディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）を検証するための評価指標であることが第一である。しかしながら、自学の調査結果の良し悪しを判断するための評価基準となるベンチマークのデータがなければ、自学の強みや弱みを明確に表明し、また改革・改善をして教育の質を保証することは、非常に困難であり妥当であるとは言えない。

今後の学生調査の方向性としては、長崎女子短期大学が所属する短期大学コンソーシアム九州（JCCK 7短大）のそれぞれが、自学の学修成果およびディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）を検証するための質問項目を作成し、その中から7短大で共通する項目を選定して「共通調査」を作成する方法が考えられる。また、「共通調査」には、認証評価や文科省の支援事業等の補助金申請に必要な設問など、7短大に共通して有用性が高い項目を精査し、それ以外に各短大が必要とする質問は「学内調査」として個別に実施するという方法が、妥当であり適切ではないかと考える。

参考文献

- 1) 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて、文部科学省中央教育審議会答申、(2012)
- 2) 文部科学省高等教育局長：学校教育法施行規則の一部を改正する省令、文部科学省高等教育局通知、(2016)
- 3) 中央教育審議会：3つのポリシーの策定及び運用に関するガイドライン、中央教育審議会大学分科会大学教育部会答申、(2016)
- 4) 武藤玲路・森弘行・山口ゆかり・本村弥寿子・荒木正平：長崎女子短期大学の自己点検・評価における学修評価システムの構築、長崎女子短期大学紀要、40、75-87、(2015)

謝 辞

本稿に掲載した調査の実施及び結果の処理に際しては、短期大学コンソーシアム九州事務補佐員の田頭未幸さんに多大なるご支援とご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。